

2-16-5 関ヶ原合戦後の金森長近—^{こうずち}上有知時代から晩年への動き—

金森長近は、「上有知旧事記」によれば関ヶ原戦後、家康と一緒に稲葉山城に登った時に、「信長公在世中、この山へ来た者、今は法印と 2 人だけになった。相変わらずの味方に満足、何なりと望みを。」と言われて佐藤領と上有知築城を願い、やがてその望みは達せられた。

史料「上有知旧事記」の一部

<翻刻文>

権現公様、岐阜山へ御登山被為遊候節の事、法印様へ、信長在世_ニ、此山へ来ル者も、今ハ法印と我等計_ニ成候、不相替味方被致、満足_ニ、何成共好_ミ可被申と、被仰候節、上有知_ニ御隠居御願被成、飛驒之国之同郡_ヲ、領知 被成候、市町御免許、御上聞被為達候御事と、申伝候

関ヶ原合戦後、家康は上洛し、諸将を賞罰した。長近には大垣城の 10 万石を与えよとしたが、長近は固辞し、武儀郡上有知の領有を強く望んだ。その理由は次の 3 点にあると思われる。

- ① 武儀郡は金森本領飛驒に通ずる重要な街道で、飛驒側からは、美濃への前進基地とする軍事上の地域だった。
- ② 中世以後、特産物により発展した地域で、その中心に上有知があった。(特に美濃紙の集散地としての経済的地位があった)
- ③ 上有知は岐阜以北の交通の最重要地点であった。(当時の飛驒への街道は岐阜—上有知—見坂峠—(津保街道) 金山—飛驒へ)

このように、軍事、経済、交通上からも、飛驒本領を守るためにぜひ必要だったのである。

1 金森長近への恩賞

関ヶ原戦後の賞罰で家康は、敵対した諸大名の領地の没収・削減を厳しく行なう一方、味方した外様大名に加増し、その領国を移すという政策を行なった。西軍の上有知城(鉾尾山城)佐藤氏は滅亡、東軍の長近は功によって本領飛驒国の安堵と、滅亡した佐藤方政の所領だった美濃国^{こうずち}上有知に關を加えた 20,000 石と河内国金田の 3,000 石の都合 23,000 石を加増された。「岐阜県史」「美濃市史」他

<加増額の不一致>

上の金森長近の石高は、岐阜県史、美濃市史による。河内国金田の分は、長近が伏見居住の便を考えて家康に所望したと考えられ、飛驒一国と合わせ 61,000 石の大名となった。

ただし、これらの石数は諸書によって差があり、正確な石数の確定はむづかしい。(分知・^{くら}蔵入地、合戦前の金森領など問題あり)

23,000 石説をとる文献は「金森先祖書」「寛政重修諸家譜」「靱負由緒書」「飛驒略記」などがある。

20,000 石説の文献には「寛永諸家系図伝」「諸牒餘録」「飛驒太平記」「金森家譜」「上有

知元地目録」などがある。

2 徳川家康と采配紙

徳川家康が関ヶ原合戦で東軍の総師として西軍と戦った時、家康が軍勢を指揮する采配の紙を、武儀郡御手洗村（現美濃市）の彦左衛門等に申し付けた。一同畏まって漉き立て家康公に差し上げた。

この紙で作った采配で指揮したところ、東軍は大勝した。やがて天下を掌握し幕府を開いた後も、この吉例を以て、采配紙をはじめ、障子紙の御用をも仰せ付けられることになった。

「佐藤鶴吉文書」に、次のようにある。

是は神君関ヶ原御出陣の時、今庄屋を相勤め候、定七先祖の者等、御采配の御紙仰付けられ御漉上げ申し候処、悦喜にて、其節御利運に相成り申し候に付、吉例を以て追々御用を仰付けられ、御治世の上、駿府より以来、御紙漉屋と仰付けられ、代々御用を相勤め申し候。御采配紙の儀別して御大切の御用には、御忌言葉の儀仰渡され、漉立て候節は格別精密に仕り候儀、今尚心得罷り在り候。（略）

采配紙は良質の厚紙に大根の汁や、みょうばんを塗って乾かしてから朱・金・銀仕上げとする。朱漆塗・金箔押・銀箔押がこれで、紙は 7・8・11・13・21 枚などを重ねて細く裁ち、その一端を立鼓という輪に順に重ねる。（「武具考」）

3 関ヶ原合戦に戦った家臣団

関ヶ原合戦後、飛驒は可重へ、上有知は長近へと主君は二分され、当然ながらその家臣も分割を余儀なくされた。

金森長近の領地が 20,000 石余増大した慶長 5 年（1600）以後、上有知に移った家臣について、「飛驒太平記」は、次のように記している。

「法印公より御奉公仕り来る者は、大半上有知にて、長近公御逝去の後、御暇取者有。

其内、肥日主水・島田四郎兵衛・池田図書、権現様へ召出さる。」

文中記述の「法印公より御奉公来る者は、大半上有知にて……」とある大半が何を意味しているか問題であるが、長近直属の家臣団たる「高山法印衆」の上級家臣の大半ともとれる文である。

可重に残されたいわゆる「古川出雲衆」は、長近が与えた家臣団であることを考えれば、法印衆と出雲衆をはっきり分離していたと言えなくもない。

記述にある 3 名は、長近の遺臣で、肥田主水忠親（母は長近の娘）、島田四郎兵衛、池田図書政長（上有知金森断絶後家康仕官）は家康から各 1,000 石宛を与えられて旗本に列した。

なお、肥田、池田のほかに島三郎左衛門にも 1,000 石与えられているので島田四郎兵衛と島とは同一家臣とも考えられる。

長近が飛驒に発した会津上杉征伐時出陣命令に、田島道閑、大塚権右衛門、今井少右衛門宛の名が散見されるが、法印衆であろう。

「田能村記」「願生記」「飛州軍乱記」「豊国武鑑」「遠藤家旧記」などの文献上から法印衆・出雲衆の一部を見ると、

高山法印衆……遠藤宗兵衛（家老）、吉田孫十郎（500 石）、石徹白老右衛門、田島道閑、牛丸又右衛門、山田小十郎など
古川出雲衆……西脇右近（家老）、西脇吉介（300 石）、西脇兵左衛門など西脇一族、田能村善次郎、佐藤彦太夫など

があるが、同姓でも違字があつたりで確定に難がある。

いざ合戦となると、多くの雑兵（家臣団の戦闘要員の多く）の動員が必要であつたし、主力の遠征では自領内に残留する家臣、出陣期間、家族などを考慮する必要があつた。

前述の会津出陣準備命令では、「3 年間免税することを条件に百姓を動員したこと」「長柄の者 50 人を動員したこと」などをあげている。小荷駄（主に兵糧・弾薬運び）、砦造りに従事したのである。

実戦では、主人と共に戦う侍（倅者・若党・足軽と呼ぶ）、主人を補けて馬を引き槍を持つ下人（中間・小者と呼ぶ）、村々から駆り出されて物を運ぶ百姓たち（夫・夫丸と呼ぶ）の雑兵たちによって支えられていたことを忘れてはならない。

ほかに「陣僧」と呼ばれる非戦闘員が武士と共に戦場へ行き、戦死者の菩提を弔ったり、和議を取り持ちたりしたことはよく知られている。合戦後戦場を訪れた僧もあつたと伝えられている。

武儀郡洞戸村の禅僧「不立」は、関ヶ原合戦の時、家康に属して戦うため村民を連れて出発したが、途中水に溺れ死んだという。

4 小倉山城築城と上有知繁栄

合戦後鉦尾山城（上有知城）に居館した長近は、ここには住まず慶長 6 年（1601）より背後に絶壁と長良川を持った尾崎丸山を選び築城に着手し、慶長 10 年（1605）に完成した。尾崎丸山を風流人長近らしく京都嵯峨の名勝にちなんで小倉山と改め、小倉山城と称した。

築城と同時に、西軍に属した佐藤氏の菩提寺だった以安寺住職鉄松和尚を開祖として清泰寺を建立、金森家の菩提寺となし、寺領 100 石を寄進した。

長近は、これと並行して、慶長 7 年（1602）の長良川の大水害後、城下町南方の台地を開拓して亀ヶ丘と名付け、ここに長良川沿岸にあった古町の人々を移転させ、永遠に水害より救った。

古町は佐藤氏時代の城下町で、今も古町、古城跡保寧寺跡、金屋街道などの小字名が残っている。

こうして新城下町上有知（旧美濃町）ができ、以後この地方の政治、産業、交通の中心地として繁栄した。長近の英断によって城下町が亀ヶ丘に移るや、長良川の水運の要衝は港町に移り、舟及び筏の寄港発着地として、上有知の表玄関となった。人も荷も悉く上有知港に集まり、上有知港から散っていった。上有知からは紙荷、曾代絹が主で、その積荷には水陸安全、桑名から海を行く荷には海陸安全と記入されていた。

産業に意を注いだ長近は、紙の生産はもちろん、養蚕も奨励指導した。養蚕が盛んだったことは、浅井図南（註 1）の「釜戸治湯日記」中に「明けゆけば二十四日なり。かど近く人馬の行き交う声とて、誰が旅立ちにやと思う。起き出で人に問えば、是れなん桑市なり」とあるのでもわかる。

註 1 函南は、尾張藩主徳川家勝に招聘され藩医となった。美濃各地巡遊紀行「釜戸治湯日記」を著した。

<引用文献>

森政治『関ヶ原合戦と美濃・飛騨』65～67 頁 岐阜県歴史資料保存協会発行 平成 12 年